

A Study on Motoko Hani's View of Children's
Literature and Educational Practice

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-02-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 美和, SASAKI, Miwa メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1390

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



羽仁もと子の童話観と教育実践に関する考察

佐々木 美 和

1. はじめに

本稿の目的は、羽仁もと子（1873-1957）の児童読み物に対する思いや考えを、彼女が残した児童読み物関連の言説や創作物への分析を通じて明らかにするものである。この児童読み物には、行為としての読書活動と共に媒体としてのお伽噺や童話などのテキストも含まれる。羽仁もと子に関する論文は、その人物像や婦人と家庭への教育や指導に関するものなどを中心に、既に数多く存在している。だが、子どもの読書や読み物について考察されたものは、雑誌『子供之友』の内容に関するもの以外では、管見の限り見当たらない。

羽仁もと子は、大正新教育を代表する教育者である。私立学校の自由学園を創設し実際に教授する一方、婦人之友社において婦人向け子ども向け雑誌を主宰し編集にも携わっていた。中産階級の女性たちに向け、母親としての役割や子どもの躰のあり方に関する多くの示唆を、雑誌記事を通じて与えてきたことで知られる。そうした家庭教育において、もと子が重視したのが子どもの「読み物」であった。もと子の児童読み物に関する思考を確認することは、今日の子どもと読み物に関する問題を解く手がかりになると考える。

本論では先ず、幼児教育や保育に纏わる先行論文等の内容を踏まえて、羽仁もと子の業績やその評価を確認する。次に、羽仁が生き方の指針として掲げた「思想しつつ生活しつつ」の内実について、『羽仁もと子著作集』の表題「思想しつつ生活しつつ」3巻に収録される論説と自由学園の教育内容に関する資料より明らかにする。加えて、家庭教育の論説等にも目を向け、羽仁もと子の児童読み物に関する考え方の特徴に“ハッピーエンド”と“乱読への危惧”の2点があることを示す。最後に、もと子の創作面に触れ、『羽仁もと子著作集』の第12巻の表題「子供読本」所収の短篇お伽噺について分析を行う。この考察過程により羽仁もと子の児童読み物観を明瞭化し、その先進性を提示する。

2. 羽仁もと子の業績と評価

羽仁もと子は1903（明治36）年、夫である羽仁吉一（1880-1955）と共に雑誌『婦人之友』の

前身である『家族之友』を創刊し、家庭生活の合理化や女性自身による修養の必要性を唱えその推奨に努めた人物として知られる。1914（大正3）年には児童向け雑誌『子供之友』を創刊、1921（大正10）年には自由学園を創設する。私学女子校の運営においては、もと子自身が修学した明治女学校の教育内容や子育てによる経験知に加え、長女説子（1903-1987）が学んだ日本女子大学附属豊明小学校（1906年、成瀬仁蔵により創設）の当時先進的であった体験型教育や信仰したキリスト教理念などの多様な要素を基盤に、独自の教育論を展開し実践した。その独自性を保持するためか、自由学園は設立当初より文部省の「高等女学校令」に沿わない各種学校として出発している。

多くの私学が開設した新教育運動の勃興期⁽¹⁾に、自由学園も登場したのである。立川正世（2018）によれば、「大正新教育」とは個性を無視した画一的な教育や実力養成に繋がらない既存の教育に対し、教育の方法やカリキュラムの改造によって教育改革を目指した運動であった。大正期に入ると、諸外国で既に隆盛していた「児童中心主義」の教育思想が日本にも大きな影響を及ぼし、従来の国家主義的で画一的な教育が問題視されるようになり、子どもの「自由」や「個性」を尊重しようとする考え方が重視されるようになる。この「児童中心主義」や「個性尊重」の理念を土台にしたさまざまな実践が、学校教育や文化芸術領域において試みられるようになる。学校の教員に限らず小説家や詩人、画家などの芸術家やジャーナリストがこの新教育運動に名乗りをあげ、活況を呈した。¹もと子の自由学園は今日、ジャーナリストによる私立学校運営の典型として位置づけられている。

羽仁もと子に関する先行研究は非常に数多いが、本稿では大正期における自由教育実践家としてのもと子に焦点をあてた考察に絞って確認した。小林輝行（1982）は、もと子の〈親子間における人格的平等と相互の人格の尊重を基軸とし、独立自主の自由人として各自が真剣に生きていく中で、相互に学びあい、ともに成長発達をとげていく……家庭生活主義の所説²に、互いの人格と自由を認める対等で新しい親子観や家族観の表出を指摘する。雲津英子（2003）も同様に、もと子が望ましいと考える親子の形は、相互に影響し合う関係性によって成立し、子どもはひとつの人格を有する個人として認めるべきとの主張に注目している。³

岩間浩（2012）はもと子の教育者としての顔について述べ、自由学園の創設について〈ジャーナリズムの背景から新教育学校が生み出されたのは、世界の自由教育実践校の中でもきわめて稀なことである⁴と評する。また、学園の教育理念である“思想しつつ、生活しつつ、祈りつつ”の文言には、〈児童・生徒が自ら考えること（思想しつつ）に重点を置く教育を目指⁵したもと子の強い思い入れがあると語る。この“生活しつつ”の文言には、良い環境（家庭や学校）を整える日々の努力が良い教育（子育て）に繋がるとする思いと共に、ベスタロッチの「生活が陶冶する」やデューイの「為すことによって学ぶ」、倉橋惣三の「生活を基本とする教育」といった先行する教

育思想の影響も看取される。

子どもの主体性や自由について相田まり（2018）は、羽仁もと子の掲げる“自由”は大きく3つの要素——子ども自身の要求に基づくこと、他者と協働しながら進歩すること、神の意志に適合すること——が含まれると論ずる。“子ども自身の要求に基づくこと”は、〈子ども自身の善悪の判断力を養い、みずからの自由と責任を自覚させるため〉⁶に必要であり、もと子が自由と主体性を一対として捉えていたことが窺える。

以上のように、大正期における新教育活動家としての羽仁もと子は高く評価されており、子どもの個の尊重と彼らの主体的な考察や探究の奨励などが共通する論題であることが確認できる。

3. 「思想しつつ生活しつつ」

前節でも述べたように“思想しつつ生活しつつ”は今日でも自由学園（女子部）の教育理念として掲げられている。と同時に、羽仁もと子の言説をまとめた『羽仁もと子著作集』（全21巻）の第2～4巻の表題ともなっている⁽²⁾。

どうか考へながら嘯みしめながら読んで下さいませ。さうして採るべき所があれば、それをごめいめいの日々の生活の舞台に生きて見て、そこからまた皆様の一層すぐれた考と生活をつくり出して下さいませ⁷

この上巻に掲げられた巻頭文の一節からも、“思想しつつ生活しつつ”の意味を解することができる。読んだ内容を鵜呑みにせず、しっかり自分の中で咀嚼し、実生活に活用することで婦人自身も家庭も質的に向上する、ということであろう。著作集の中から何篇か紐解き、婦人読者に伝えたようにした子どもと教育の関係、親子関係のあり方についても読み解いていく。

(1) 論説

1924（大正13）年10月と文末に付された「頑童世に満つ」では、〈知識や技術を授ける教育はあっても、人の心を陶冶する教育は、今この国に殆ど稀である。無力な今の教育は、子供らの性情や思想の悪化するのをどうすることも出来ない〉⁸として軍事教育を含む当時の教育状況を憂いている。この“思想の悪化”という言い回しから、教育の本分は子どもが有する思想力の向上であるとするともと子の思いが伝わってくる。

子どもの主体性や人格の尊重について、「人生と自由」（1914（大正3）年11月付）では明確に〈成年に達して初めて一時に自由になるのではなく、子供の時からその思いと行動とを、その子供

としての領分において自主独立にしなくてはならない⁹と唱え、幼稚園児に母親が買い与えた“赤い帽子”を例にあげて解説する。新奇な赤い帽子を買い与えたら子どもがひどく嫌がった場合に、親が取る3つの対応例が先ず列挙される。1つ目は、せっかく買ってきた帽子だからと無理に被らせる。2つ目は、子どもの希望にそって別の気に入る帽子と取り換える。3つ目は、子どもが納得して着帽できるように新しい帽子の知識を与えて、子どもに被るか否かを考えさせる。もと子は、前者の2つは子どもの自主独立を認めておらず、子どもが新しい物（知識）を得る機会を与えていない点でよろしくない、とする。3つ目が好ましいのは、赤い帽子は自分が被るのに適当であると解するまで、子どもの思いに従って被らせずにおく点にあり、子ども自身が考えたその結果（思想）を大人は尊重することが肝要であると述べる。また、乳幼児であってもその自主独立は尊重すべきことであると「夫婦の個性」（1914（大正3）年1月付）に記載がある。〈唯二つ三つの子供でも、生れたばかりの子供でも、自分の力でなし得ることがあります。自分の力で責任を負い得ることがあります¹⁰〉として、赤ん坊は“寝ているだけ”ではなく“寝ている力”を有する存在として認めること。無理に抱きかかえる必要はなく、幼児であれば親は見守りつつ、出来る範囲で子ども自身にやらせてみるのが大切であるとも語る。子どもとの日々の関わりから大人も学び成長するとする子育て観は、2000年代の幼児教育・保育の現場でも通用する内実を有している。

このように、子どもの主体性や人格の尊重に関する言及は、大人と子どもの関係（親子関係）の互助性へと繋がっていく。〈われわれが赤坊を育てる間に、その幼弱にして私たちからすべてのものを受けるばかりのように思われる赤坊から、多くのものを与えられつつあることを見出します。赤坊にそうした自覚もまた努力もなくても、ほんとうに多くのものを与えられることは事実です。ただ親から子にすることが自覚的であり、目につくことであるために、心を深くしなければ、幼きものから此方にうける贈物が分りにくいのです。〉¹¹ この「親と子と」（1926（大正15）年3月付）の記載にある“幼きものから此方にうける贈物”という表現によって、子育てを双方向的な贈与関係として捉えようとするもと子の考え方が明確に読み取れる。

子育てで活動が必要となる“児童読み物”や子どもに話を読み聞かせる行為については、「両性の融和」（1919（大正8）年8月付）において、〈一日に三十分でも十分ですから、家庭に読む時間をつくって、その日の新聞の中からでもその月の雑誌の中からでも、子供の番には読本でもお伽噺でも読むようにすることなども、家内のものの心持に触れあわせるために手軽で有効なこと¹²〉であるとして、婦人、特に母親の読書励行を促している。大人が読書を通じて思想を深め、それを子育て等の家庭生活の中で生かしつつ家庭環境を改善していくことが、もと子が希求する女性の務めなのである。

(2) 自由学園

次に、「思想しつつ生活しつつ」を教育理念とする自由学園での教育活動について見ていきたい。学園新設に際して、羽仁もと子が雑誌『婦人之友』（1921（大正10）年2月号）に掲載した学校案内記事に「『自由学園』の創立——私共同士の新事業にご賛成を願います」というものがある⁽³⁾。そこでは児童・生徒を若芽、教員を園丁に模して教育活動への思いを寄せている。児童読み物の観点で注目すべきは国語科授業について述べた次の一節である。〈時文にたいする十分な読書力を養い、時文をもってめいめいの思いを十分に述べ得る力を持たせること〉¹³を目的に掲げ、授業で使用する教材も様々な文章の抜粋を寄せ集めた当時の文部省教本ではなく、国木田独歩や島崎藤村、徳富蘆花の散文作品や詩、紀行文などから羽仁夫妻が独自に選んだものを用いていたようである。自由学園の卒業生羽仁恵子はその回想文で、島崎藤村の「ふるさと」や「幼きものに」を授業で読み、指導担当の羽仁夫妻から乱読はせずに〈物を読んだり書いたりする時は、深い心でよく考えながらしなくてはならない〉¹⁴と、読書時の心構えに関する指導があったことを伝えている。自由学園において、国語科は高い位置づけがなされていたようで、同学園の卒業生会発行の冊子には〈国語を、ひろい意味、即ち日本人としてはそれによって全ての知識にいたる道が開け、国語力がなければ、思想の練磨も出来なければ、発表もできないものとして、一番大事な学科とされ、女学校の方は満二年間、羽仁両先生お二人で本気で指導されました〉¹⁵との記載が残されている。本を読み、その内容について自ら考え、その考えを言葉にして表現する国語教育は、当時において、新しい教育実践であった。読書の教育効果に重きをおく羽仁夫妻は、当時の公立学校では筆頭科目であった“修身”を削り、その代替として“読書”と“懇談”を教育課程に組み入れた。懇談とは、学園生活での諸事に関して児童・生徒間で話し合い相談し合う時間を意味する。立川（1988）は、この読書と懇談は、児童・生徒めいめいの心に自由且つ健全な宗教心の素地を養う機会として設定され、一人ひとりが自分の理想とする生活の創出を促す活動であったと評価している。¹⁶

4. 児童読み物観

読書活動に高い教育的価値をおき、教授科目の主軸に据えた羽仁もと子は、その教材たる児童向け読み物についても一家言を有している。著作集を調査する中で、読書活動や児童出版物に関する論説の記載から次の2つの主張を汲み取ることができた。(1)内容については残酷な描写や復讐譚などを避け、結末が幸福（ハッピーエンド）であること、(2)本を読むおよび与える行為（読書活動）については、乱読は厳に戒めるべきこと、である。

(1) ハッピーエンド

『羽仁もと子著作集』第10巻収録の「家庭教育の実験」という長文の一節「第二 母親の陥りやすき誤謬」には、母親が子育てにおいて避けるべき対応の諸々が列挙されている。その中に「お伽噺について」という問答形式のくだりがある。¹⁷ 子どもは成長発達に従って、お伽噺や昔話を読んでもらい聞くだけの受動態から、単独で本を読もうとする能動の意識が芽生えるようになる。もと子の実子たちも長じて自ら選んで“絵草紙”を買うようになったが、その中身に問題の多い読み物も少なくなかった。中産階級の台頭で子どもの教育への関心が高まる中で、児童出版物の需要が急激に高まり児童雑誌や児童図書が市場に溢れ、玉石混交の態をなしていた。もと子はいくつかの状況下において、大人（母親）は子どもに与える作品を選定する目を養い、不適切な作品は避け、時にその内容の改作も良しとする考えを示した。絵草紙の中には〈教育などということに考えのない商人のつくったもの〉¹⁸も多く、お伽噺や昔話が本来持っている“面白くて為になる”特質が損なわれており、読者である子どもを害するものも少なくないと主張する。

では、どのような内容であれば“面白くて為になる”のだろうか。羽仁もと子はいくつかの昔話を例にあげて、改作時の方向性を指示する。「桃太郎」の場合、その結末部で“宝物をあげますから、命ばかりはお助けください”と鬼に言わせるのでは、単に桃太郎の剛腕を強調することになる。それよりも、桃太郎が鬼退治に出立した動機や理由を子どもにわかりやすく提示して、終わり方も桃太郎に許された鬼が喜んで宝物を献上するような表現に変える方が良いとする。「舌切雀」については、小雀の舌を驅が切るという話の設定自体が残忍すぎるとし、爺が心配して小雀の宿を訪ねてみると、薬をつけたおかげで傷はすっかり治ったこととし、〈舌を切ったということも自然に軽いこっけいな事実のように〉¹⁹加筆修正する必要であると唱える。「かちかち山」は〈話の組み立てから全然子供のためによくありません〉²⁰と有害図書の判定を下し、「猿蟹合戦」は「かちかち山」に比べれば滑稽味があるので、玉子や蜂や白による攻撃的な内容を猿が〈思いがけずほうほうの目にあって、うろたえた有様を現しさえすればよい〉²¹として、抑えた表現に直すべきであると述べる。

こうした話の展開にとどまらず、子どもの読書の目的や効果の側面から、教育と娯楽のいずれかに偏った本ばかりを読むのではなく、お伽噺や昔話は教訓的な作品と滑稽な作品の双方を半々くらいずつ与えるよう、母親読者に教示する。内容の偏りを避けるべく、「桃太郎」あたりから始めて、子どもが十分に堪能し飽きてきた様子を見せたら、別の作品を話してあげるなど、目的と効果を意識した読み聞かせが大切であるとも語る。要するに、玩具と同様、一時にたくさん与えることは控えて、子どもの1日の読書時間や読書量を親が制限する配慮が求められると主張している。²²

(2) 乱読の弊害

お伽噺や昔話の内容やその展開についての注文と共に羽仁もと子が注意を促したのが“乱読”の弊害である。前掲著作集第10巻所収の「続家庭教育の実験」に「乱読の害」と題された一文がある。²³子ども向け雑誌や読み物の出版が急増する状況下において、そうした図書の乱読は〈子供は生ものしりに、そして本当は子供の頭を非常に悪くする〉ともと子は憂慮する。そして、乱読によって生じる弊害として次の2点を提示する。1つは、十分に本を読めない子どもの拾い読みは、彼および彼女らが大人になっても、内容や知識の理解が判然としなくても曖昧なままで受容する悪癖に繋がってしまうこと。もう1つは、娯楽目的だけでお伽噺などを読んでいると、子どもが小学校へ就学した後、学業に身が入らなくなる、ことである。読解力のない頭で勉強しても面白味を感じ取れず、無気力な学習態度へ陥る危険性が高まる、と注意喚起するのである。²⁴

こうした子どもの乱読を防ぐためにも、大人、特に母親が子どもの読み物を選び読み聞かせることが肝要であると、もと子は繰り返し唱える。「子供と読み物」(1915(大正4)年10月付)において、真の読書活動とは、話の筋だけでなくその道理や因果を理解し、自分の事と引き比べ応用して考えようとする力を育むことであると表明する。²⁵大人による読み聞かせを経た子どもであっても、それが真の読書活動に合致したものであったのなら、子どもが自分独りで読めるようになってもしっかり時間をかけて精読するようになり、本当の意味での“読書力”を体得できる、というのである。当時の子どもの乱読に対して羽仁もと子が強く危惧していたことは、次の様な一文からも窺える。〈粗雑に物を読み散らかすと、ほんとうの読書力は少しも発達しないのですから、上品な為になる、味わうほど面白味のつきないというような話は、了解することが出来ないで、刀をふり上げたの、身投げをしたのと、下等な目まぐるしいような刺激的の話でなければ、わからないようになってしまいます。そうしてそういう下等な読み物に、だんだん溺れてゆく青少年少女が多いものですから、またその好みに投じて売ろうとするような読み物も、多くなってくるというようなわけでしょう。〉²⁶

精読する習慣を子どもに身につけさせるには、段階を踏み徐々に本や雑誌を与え味わって読ませること、良質な話を選んで与えることが重要であり、それは家庭においては母親の役割であると説いている。子どもの図書離れが問題となり、子どもになるべく多くの本を読ませるべく「100冊ノート」が製作され図書館等に設置されている今日の視座からは、羽仁もと子の1冊を何度もじっくり読み込んで、飽きたら次の本を与えるとの主張に違和を感じるかもしれない。また、古い言い回しや語彙、展開を含め、昔話やお伽噺の中身を制作当時のオリジナルに戻して子ども読者に与えようとする動きがある中で、改作を推奨するもと子の提案もまた今日的にはズレとして感受されるかもしれない。1910～30年代は、多くの児童出版物が大小の出版社から刊行され、良

書悪書が混在しそれが見極め難い状態にあった。若草若木を培う“園丁”を自称する羽仁もと子は、子どもの生活習慣や思想に影響を与える図書は良質な肥料であり厳選し、過剰な枝葉末節は必要十分なものを残して剪定し読書の根幹を守ろうとしたといえる。子どもの読み物に関しては当時、大人の積極的な関わりが不可欠である、ともと子は説いたのである。

5. 「お伽噺」の創作——『子供読本』

本稿で多く引用した『羽仁もと子著作集』掲載文の大半は雑誌「婦人之友」が初出である。こうした羽仁もと子による婦人雑誌の刊行や私学「自由学園」の創設と運営が、女性や女子に向けて「思想しつつ生活しつつ」の発揚を促すものであったことを前節まで確認した。同様に、子ども一般の“読書力”向上を目して、児童向け雑誌「子供之友」とは別に『著作集』の第12巻として冊子化され上梓されたのが、子ども版「思想しつつ生活しつつ」とも謂える『子供読本』(1927(昭和2)年)である。その序文「私のお伽噺——巻頭の言葉——」には明確に、本著が「思想しつつ生活しつつ」の理念を掲げていることが記されている。

お伽噺はそれを書く時の文章ばかりでなく、読む時にも話す時にも、明瞭に平坦に親しみ深くして、あきずにく度も読んだり話したりしているうちに、自然にその心に同化するようにしなければなりません。

さきに皆様に読んでいただきました『思想しつつ生活しつつ』と同じように、この篇は、子供と少年少女のための『思想しつつ生活しつつ』です。

『思想しつつ生活しつつ祈りつつ』の生涯は、幼き日よりはじめられなくてはならないと思うからでございます。²⁷

『子供読本』は、いろは四十七を頭文字に据えた47枚のかかるたの意匠で一仮名ずつ短篇作品が収録されている。出版初期の「子供之友」は公立施設における所蔵数が非常に少なく、国会子ども図書館(東京都台東区)と札幌市立中央図書館(北海道札幌市)の2施設で15冊あるのを確認し、デジタル資料と現物との双方とで15冊のみ閲覧できた。この文献調査を通じて、『子供読本』の初出が雑誌「子供之友」の創刊から6年間(1914~1919)に掲載された“新撰いろはかるた”であること、毎号掲載ではないが“いろは順”に掲載されていたと推測されること⁽⁴⁾、初出版と冊子版とでは大きな異同があること、以上3点の書誌情報を把握した。

次に、『子供読本』所収の短編作品の内容について分析すると、その特徴を3つ示すことができる。第1に、47話の大半が、諺や故事成語、名言等から着想を得たと思われる短い話で、文学性

や物語性よりも教訓性・教育性が強く感じられる。羽仁の言に従えば、子どもの生活を素材として〈一ニカ所のほかは悉く創作〉²⁸したものである、という。

2つ目の特徴は、善と悪・好ましい者と好ましくない者の対比がキャラクターを通じて明瞭に描出される作品が多い点である。いくつか例示してみると、状況によって自分で判断を下した“司馬光（温公）”と親に言われたことしかせずに諸々失敗する“エバミノダス”（「り 臨機応変」）²⁹、得することが好きでズルいことばかりする“損太郎”と損太郎の妨害に負けずに工夫や努力を重ねる“徳太郎”（「そ 損をしてとくをとる」）³⁰、何か自分でやって叱られたり笑われたりするの嫌なために何もやらない兄の“太郎”とまずは何にでも果敢に取り組んでみる弟の“次郎”（「ね 寝ていてころんだためしはない」）³¹、“気短太郎”と“気長太郎”（「や やけのやん 八」）³²、毎日丹精して花壇の世話に勤しむ“友子”と何もしないで他人の花壇を羨む“すね子”（「ま まかない種子がいつ生える」）³³、何事にも迅速に対応する兄の“早太郎”と後回しにして損をする弟の“ゆだん太郎”（「ゆ ゆだん大敵」）³⁴などである。こうしたキャラクター分けによる創作からは、同時期の『子供之友』に掲載された「甲子・上太郎」との強い関連性を指摘できる。馬場清子（2015）が『子供之友』に携わった児童文学者や童画家の活躍に関する論述の中で触れる〈この雑誌では、羽仁もと子によって子どもの生活の心得が手本を示しながら説かれている〉³⁵とするものに、「甲子・上太郎」が含まれていると推察する。「甲子・上太郎」は、評価や質の高低を表す「上中下」と「甲乙丙」にそれぞれ前者には“太郎”が後者には“子”がついて6人の男女キャラクターを見立てる。甲子と上太郎は望ましい習慣や態度を身につけているが、以降は徐々に劣り丙子と下太郎は子どもが見ても残念な姿で描出されている。単に優劣を子どもに示しているというよりも、甲子や上太郎を模範として、どうしたら甲子や上太郎に自分もなれるだろうかを、子どもたちに考えさせる内容の記事である。子ども読者が「甲子・上太郎」の頁をよく読んで、感じた疑問を編集部に送り、それを編集者が誌面を通じて返答しているやり取りも確認できる⁽⁵⁾。こうしたキャラクターの描き分けによる創作は、羽仁もと子の得意とするところであったのだろう。

3つ目の特徴は文体面に見られる。作品の中で、読者である子どもに「皆さん」と呼び掛けたり尋ねたりする表現が多用され、話し手（書き手）の存在を強く感じる語り口となっている。『子供読本』を羽仁もと子が、当時隆盛していた「童話」ではなく、敢えて「お伽噺」と称しているのは、この“口演性”に拠るためと推察する。特に「皆さん」との呼び掛けは冒頭や結部での使用頻度が高く、それにより語りが強く読み手に意識される。いくつか例を挙げてみよう。「ろローマは一日ではできない」の結末部には、〈皆さんも、算術も国語も習字も、皆よくできたいと思うなら、毎日時間をきめて、その日に学校でならったところは、一つ残らずはつきり心にわかるように、今日も明日もなまけないで勉強して下さいませ。〉³⁶とのメッセージが残され、「か か

わいい子には旅をさせ」では〈皆さんもわかったでしょうか。〉³⁷と内容理解を確認する一言が挿入されている。〈皆さん考えてみて下さいませ。〉³⁸（「ら 勞するものにむくいあり」）や〈塞翁のようにおちついて考えてごらん下さい。〉³⁹（「さ 塞翁が馬」）のように、読書の目的である思考を促す台詞も当然ながら含まれる。

このように一つひとつ作品の内容分析を進めていくと、羽仁もと子の児童読み物観が反映していると感受される作品、子ども自身に考えさせたり、教員と児童の問答（対話）を通して諺の深い意味を探究したりするものが確認できる。例えば「か かわいい子には旅をさせよ」では、教員と児童が問答を繰り返しながら諺の真意を探求する展開になっており⁴⁰、「と 虎に翼」⁴¹や「み 三つ子の魂百まで」⁴²は本文で示される諺を子どもが自分自身や日々の生活に引きつけて意味を考える展開となっている。

中でも「お 鬼の目にもなみだ」に登場する青鬼のキャラクター造形とその物語展開は興味深い。簡単なあらすじを記すと、鬼の大將に命じられた青鬼が、重い病気の母親を鬼籍に迎えるべくその家へ向うのだが、そこで目にした苦勞しながらも互いに勞りあう母子の様子に涙して、何もせずに戻っていくというものである。「鬼の目にも涙」という諺は、無慈悲な者も、時には慈悲心を起こし、涙をながすことがあるという意味であるから、合致した内容ではあるのだが、冊子版の最後の場面を読むと、本来の「鬼が泣く」という“意外性”は希薄化している。

窓からのぞいていた青鬼の目からは、大きな涙がポタリポタリと落ちました。そうして孝太郎の母さまを、鬼のいるところにつれて行くのがいやになりました。孝太郎が大人になって、母さまがモットモットおばあさんになってから、よい人ばかりいる天国に行くのだろうと思って、一人でかえって行ってしまいました。⁴³

次に、初出（雑誌掲載）版と冊子版を比較分析してみると、孝太郎の家庭環境が後者では母子のひとり親家庭であることが明示されるだけでなく、前者には冊子版の結末部の後に次の文章が続いている。

せかいぢうのおとなやこどもが、みんな孝太郎のやうにかんしんな人になつたら、鬼がみんななみだをこぼして、かうさんするでせう。

さうして鬼のすみ家がなくなつてしまふでせう。⁴⁴

冊子化に際して、執筆者が上記部分を削除した理由は推測するしかないが、なぜ鬼が任務を果たさずに泣き帰っていったのかの理由を、子ども読者（聞き手）自身に考えさせるためであった

と考える。主人公である青鬼は、父親を早くに亡くしたひとり親家庭で苦勞する少年の姿に接し、激しく動揺し、自分で考え、任務を放棄するという形ではあるがその思いを行動に移す。この青鬼の造形こそ、羽仁もと子が希求する「思想しつつ生活しつつ」を実践する子どもの化身であると言える。ちなみに、他者を思って涙する鬼の姿を描いた作品として浜田広助の『泣いた赤鬼』が有名だが、こちらは「おにのさうだん」というタイトルで1933（昭和8）年に雑誌掲載されたのが初出となるので、勝敗ではなく涙する鬼の登場は「鬼の目にもなみだ」一編の方が先となる。

論説だけでなく創作においても、羽仁もと子は子どもの主体的な探究心を重視する姿勢を堅持しており、良質な読書活動が大人だけでなく子どもの生活にも有益であることを示している。

6. おわりに

羽仁もと子による読書活動に関する言説や子ども向け読み物の創作の分析を通じて、彼女の教育観や子ども観、並びに児童読み物に対する考え方を確認した。もと子の発言や作品は、現代の幼児教育・保育の視座からは古い考え方に映るかもしれないが、軍国主義の一方的な教育が主流であった当時においては、非常に先進的なものであったといえる。また創作も、同時代の子ども向け作品群とは一線を画し、教訓性に富むものの、子どもが自身の生活を通して考え実行し、その思いを主張することを第一としている点が特徴であり、非常に今日的であるといえる。実際に『子供読本』を日々の教育活動に生かしている幼稚園もあると聞く⁶⁾。

近頃、対話的教育・保育の考え方に関心が持たれている。羽仁もと子にとっても、子ども同士の、ないし大人と子どもとの双方向的なやり取りは課題であり目標であった。そこでもと子が重視したのが、子どもがじっくり考える探究心とそれを発する表現力の涵養である。その探究心を培い表現力を発揮する場が、教育・保育の機関や雑誌媒体であったといえる。読書は本の冊数の多寡よりも、一冊一冊をじっくり読み、内容に関する考えや思いを子どもが十分に表せるように、十分な時間をかける必要があるとするもと子の考えは、子どもの読書離れ問題を解く上で示唆に富むものと考えられる。

羽仁もと子は、「思想しつつ生活しつつ」を理念として掲げ、日々の思索とそれを生活に生かすことが大切であると説いた。本論では、自由学園の教育実践であった“懇談”の内容や「子供之友」に投稿された子ども読者の自由画や作文など、子どもの表現力向上に向けた羽仁もと子の実践について十分に論述できていない。今後の課題としたい。

（本稿は、第72回日本保育学会研究大会で口頭発表したものを論文化したものである。引用文については、常用漢字に改め仮名遣いは原文ままとした。）

《注》

- (1) 自由学園が創設された目白は、当時「目白文化村」と呼ばれ多くの学者や文化人が居を構えた郊外地区であった。そこには日本女子大学附属小学校の他にも明治女学校、川村学園、成蹊実務学校、児童の村小学校、学習院、立教大学などの多くの私学が所在していた。
- (2) 『羽仁もと子著作集』(全21巻)の各表題は以下の通りである。第1巻「人間篇」第2巻「思想しつつ生活しつつ(上)」第3巻「思想しつつ生活しつつ(中)」第4巻「思想しつつ生活しつつ(下)」第5巻「悩める友のために(上)」第6巻「悩める友のために(中)」第7巻「悩める友のために(下)」第8巻「夫婦論」第9巻「家事家計篇」第10巻「家庭教育篇(上)」第11巻「家庭教育篇(下)」第12巻「子供読本」第13巻「若き姉妹に寄す」第14巻「半生を語る」第15巻「信仰篇」第16巻「みどりごの心」第17巻「家信」第18巻「教育三十年」第19巻「友への手紙」第20巻「自由・協力・愛」第21巻「真理のかがやき」。2019年4月15日に全巻が婦人之友社より電子書籍化されている。
- (3) この記事には次の様な一節が含まれる。「……私は早春の百草千草の芽のように、のびようのびようとして子供の頭の中に動いているさまざまな働きに、親切な園庭のようなあたたかい導きの手を与えてやるのが、どんなに楽しいまた大切な仕事であるかを、深く深く思わせられた」(羽仁恵子(1965)自由学園の教育、婦人之友社、17)
- (4) 『子供読本』の掲載順タイトルと「子供之友」掲載号を表にしてまとめると、毎号ではないがいろは順に掲載されていると推察することができる。これに関しては、文献調査を継続して初出情報を今後明らかにしたい。

表 『子供読本』タイトル一覧

い	今は世界の日本国	れ	歴史はくりかえす	こ	ころんだらおきよ
ろ	ローマは一日では出来ない	そ	損をしてとくをとる	え	得手八人力
は	走るよりは歩め	つ	月はまんまる	て	敵をも愛せ
に	二兎をおうものは一兎をえず	ね	寝ていてころんだためしはない	あ	朝起万円
ほ	蛍のひかり窓のゆき	な	なまけものの節句ばたらき	さ	塞翁の馬
へ	下手も上手のうち	ら	労するものにむくいあり	き	きまりわるさはちょっとの間
と	虎につばさ	む	むりむり大将ばか大将	ゆ	ゆだん大敵
ち	力はあるもの出せるもの	う	打てばひびく	め	めんどうしんぼう
り	臨機応変	ゐ	井の中のかわず	み	三つ子の魂百まで
ぬ	抜かぬ太刀の功名	の	野こえ山こえ里をこえ	し	四海兄弟
る	類は友をよぶ	お	鬼の目にもなみだ	ゐ	えんりよは無用
を	おかめ八目	く	愚公山をうつす	ひ	ひろきを心
わ	笑う門には福きたる	や	やけのやん八	も	求むるものには与えらる
か	かわいい子には旅をさせ	ま	まかない種子がいつ生える	せ	先生はどこにでも
よ	慾のくまたかのみとりまなこ	け	げらげら笑いのどん腹たて	す	すきな友だちきらいな友だち
た	宝の山はどこにある	ふ	豚に真珠		

- (5) 「子供之友」8巻10号(1921年10月号)の懸賞オテガミの欄に、大阪府の読者による次の内容が先頭で掲載されている。〈七月號ノ子供の友ノ甲子サンハ、カミナリガナツテモ ヘイキデ、オニンギヤウアソビヲ シテキルノハ エライトオモヒマス。タダアシヲダシテキルノハ オギヤウギノ ワルイコトト思ヒマス。〉それに対する編集分の返事は〈ベンキヤウ スルトキトハ チガツテ、アソプトキハ ジユニ シタハウガ ヨイトオモヒマス。〉である。こうした読者の疑問に対する編集側の真摯な応答態度にも、羽仁もと子が注いだ子どもに対する視線や姿勢が窺える。
- (6) 千葉幼稚園(青森県八戸市)では、『子供読本』を読み聞かせ教材として日々活用していることを岡本潤子園長より教示いただいた。千葉幼稚園のホームページを参照(<https://chibayouchien.ed.jp/>)。

引用文献

- 1 立川正世 (2018) 大正の教育的想像力——「教育実践家」たちの「大正新教育」——. 黎明書房. 216-231
- 2 小林輝行 (1982) 大正期家庭教育論における子どもの権利——羽仁もと子と安部磯雄の家庭教育論を中心に——. 信州大学教育学部紀要. 第46号, 19
- 3 雲津英子 (2003) 大正期子ども観の研究——沢柳政太郎, 野口援太郎, 羽仁もと子を中心として. 児童教育研究 (安田女子大学児童教育学会編). 第12号. 21-29
- 4 岩間浩 (2012) 羽仁もと子・自由学園と新教育運動. 教育新世界. 37巻1号. 40
- 5 同上. 41
- 6 相田まり (2018) 羽仁もと子の教育思想における神の二面性について. 東京大学大学院教育学研究所基礎教育学研究室研究室紀要. 第44号. 40
- 7 羽仁もと子 (1927) 羽仁もと子著作集第2巻 思想しつつ生活しつつ (上巻). 婦人之友社. 巻頭部
- 8 羽仁もと子 (1928) 羽仁もと子著作集第13巻 思想しつつ生活しつつ (下巻). 婦人之友社. 278
- 9 前掲(7). 34
- 10 同上. 266
- 11 同上. 46
- 12 羽仁もと子 (1928) 羽仁もと子著作集第2巻 思想しつつ生活しつつ (中巻). 婦人之友社. 206
- 13 羽仁恵子 (1965) 自由学園の教育. 婦人之友社. 20
- 14 同上. 58
- 15 自由学園女子部卒業生会 (1985) 自由学園の歴史 雑司ヶ谷時代. 婦人之友社. 27
- 16 立川正世 (1988) 羽仁もと子の教育思想. 名古屋大学教育学部紀要・教育学科. 第35巻. 65-66
- 17 羽仁もと子 (1927) 羽仁もと子著作集第十巻 家庭教育篇 (上巻). 婦人之友社. 153-156
- 18 同上. 153
- 19 同上. 154
- 20 同上. 155
- 21 同上. 155-156
- 22 同上. 156
- 23 同上. 281-283
- 24 同上. 283
- 25 羽仁もと子 (1927) 羽仁もと子著作集第十巻 家庭教育篇 (下巻). 婦人之友社. 151-155
- 26 同上. 154
- 27 羽仁もと子 (1960) 羽仁もと子著作集第十二巻 子供読本. 婦人之友社. 2-3 (初版は1927年だが, 本稿では1960年の改版を参照している。初版と改版の異同は「新刊にあたって」の一文の有無のみである)
- 28 同上. 2
- 29 同上. 38-42
- 30 同上. 69-70
- 31 同上. 77-81
- 32 同上. 119-121
- 33 同上. 122-126
- 34 同上. 165-167
- 35 馬場結子 (2015) 羽仁もと子の家庭教育に関する一考察——母親の生き方と子どもの生活を中心に——. 淑徳大学短期大学部研究紀要. 第54号, 85
- 36 前掲(27). 21
- 37 同上. 60

- 38 同上. 91
- 39 同上. 161
- 40 同上. 54-60
- 41 同上. 33-35
- 42 同上. 176-179
- 43 同上. 115
- 44 羽仁もと子 (1916)「子供之友」3巻6号. 婦人之友社. 不明 (頁番号の付記なし)

(提出日: 2021年9月21日)